



新神話超常体験
のうちカナメにな
る二つのこと

yae-mon

満50歳の壁を突破させたのは奥津嶋姫弁才天だった

考えてみれば、私ほど傲慢な者はいないでしょう。

普通の人には、自分の人生の吉凶禍福の展開に責任を持つものです。ところが、私は吉事や福事的时候はこれで普通と思い、感謝も満足にせず、凶事や禍事的时候には自分の過失は棚上げにして天の責任にしていたのです。

そして、先行きの見通しもこの程度かと判断できた頃、四十歳代の時でしたが、天に向かって「人生五十年というとおりに、私の寿命も五十年で終わらせてほしい。次の転生の予定があっても、金輪際拒否します」と請願したのです。

たまたまその頃、心房細動を発症し、薬でいったん直ったものの、肝機能が悪化したため医者に行かなくなり再発。とうとう、投薬では元通り治らないことがわかった頃だったでしょうか。また、結婚もしていなかったことも、人生を面白くなくしていたのかもしれませんが。それでもなお、変人もいいとこながら、たまたまある寺院(淡路島の世界平和観音像)に行ったときに見つけた弁才天の仏像に線香を上げながら、「もしよければ結婚してください」と手を合わせたのです。(おいおい、本当に変人もいいとこだな)

ところが、不思議なことが起きました。

私がまさに満50才を迎えるという直前日に、それ以降書き続けることになる新神話の最も大事なパートナーになるころの女性が、初めてメール連絡してきてくれたのです。しかもその日に2通も。私が1997年頃から開設していた物語創作サイトのホームページを読まれてのことでした。

そのとき、私は天に請願した経緯は微塵も頭に上らず、漫然と50の境を過ごしていました。まさか天が本気にされているなどは、思ってもみなかったことだったのです。

しかも、この女性は弁才天ゆかりの人であることも、お付き合いするうちにわかってきました。弁天三姉妹のうちの"奥津嶋姫"様の化身だったのです。

ただし、下界的な結婚は無理な状況でした。そこで新神話の中でのみ魂の婚儀を二人の合意で執り行いました。

ただ、これも不思議なシンデレラの時間のようなものでした。限られた期間が割り当てられていたようです。

が、その期間、私にとっては不思議づくめのインディーな世界になったのです。

この人の名は新神話(実話に基づく私小説)において、"カンナオビ"としています。私が理想とする浄化の神・カムナオビ神にちなみます。

移情閣での鶴亀統べるの儀式から9日目に火の鳥が発進する

私は、神戸の舞子の移情閣復元直後の何ヶ月目かに、不思議な霊能女性と知り合いました。2000年7月のことです。当時、物語創作サイトと併設していた、超常現象趣味のサイトを頼って、この女性は家庭生活上の精神苦につき何か解決の糸口が見出せるかも知れないと思い、メールしてられました。そして、メールのやり取りでアドバイスをしてさしあげていたのです。

そうするうち、私に信頼を寄せてくれたらしく、彼女は自らの霊媒体質に起因する様々な不思議経験を語るようになり、ついに核心的な話を始めました。

彼女は、幼い頃(10歳の頃)に連日、同じ夢ばかりを見続けたと言います。それは魔物に追われる夢で、いつも移情閣に逃げてきたところで、扉がどこも開いておらず、悪夢から目を覚ますのです。ところがある日の夢で、その扉が開いていて、その中に逃げ込んだものの、今度はそこに閉じ込められる夢を連日見ることになります。そしてまたある日、とうとうその中の霊的存在とコンタクトすることになるのです。

その存在は青年として現れ、三階から下りてきて二階で彼女と会って、その直後、夢は急展開し、閉ざされていた窓が開き、館内から脱け出せたと言います。このことから、この人にとっては青年が救世主的存在に思えたとのこと。

以後、彼女はこの夢を大事なものと思い、謎の青年の姿を通学時や通勤時に、人混みの中に探すようになったと。なぜなら、移情閣が夢見た光景そのままに実在しているのだから、夢の青年もどこかにいるに違いないとの思いからだと言います。(彼女が伊勢正三のファンだったのは、似ていたからだという。そう、私にやや似ています)

その女性は言います。夢の中で魔物に追われていたのは、破れかけた袋を持っていて、破れ目から光が放射していて、どうやらそれは魔物のところから持ち出したもので、おそらく何かの宝物であり、この青年に届けることができたのではないかということです。

まるで童話ファンタジー話ですが、そのような人と出会って話を聞いた私は、同じようにファンタジーの世界に取り込まれて今があるような気がしています。

そして、その内容を書き留める必要ありとして、こうして成ったのが新神話でした。

この出会い、具体的には、次のような事象の現れ方をしています。

2000年9月27日昼前、明石駅で待ち合わせして、舞子浜の移情閣に向かった。まず舞子ビラで食事して、現地でシミュレーションしようということになった。ビラの最上階からの瀬戸内海と明石海峡大橋の袂にぼつり小さくたたずむ移情閣の眺めに、目をやりながらの食事。

それまで何度かのメールのやり取りで、私に相談すれば何かが変わると信じて、彼女はもしかす

るとそうなのかもしれないと、幼少期に繰り返し見た同じ夢の中の、移情閣を舞台にした夢話りの、扉を開く青年の役割を私が演じてくれるのではないかと期待して、その日は初対面したことになる。

ゆっくりと食事をとり、午後1時過ぎに移情閣に入り、一階、二階と見て回る。創設者は華僑で海運事業で財を成した呉錦堂。海上輸送をしていたことから、移情閣は瀬戸内の龍を鎮め航行の安全を図るために創建したという八角三層の風水塔であった。(呉錦堂はフリーメーソンのメンバーである)

さて青年は三階にいて二階に下りてきたというのだが、問題の三階は現在でも拝観禁止になっており※、そこに至る階段からして真っ暗闇なので何もわからない。通行禁止となっている立看板の横を通り、途中まで上がると、外光を受けて、天井の一角に掲げられた額の水墨による字が伺えた。右書きで「蓬莱第一」と書かれていた。

(以後、新神話における最も大切な場所が蓬莱島という設定になった)

その二階で我々は、自分伝説を語らいあう。私は鶴だと祖母経由ながら、高名な占い師に言われたのだと言うと、彼女は自分は亀だと言う。たしかに乙姫顔で、髪をあんなふうに結ったらぴったりだ。

私は地元が丹後半島だから、浦嶋だとも伝え、かごめ歌についても語らった。

鶴亀すべるとは統一する、ひとつになる、一堂に会するという意味だと伝える。

だったら、シミュレーションすることで、何らかの効果が期待できるかもしれないと、お互い頷き合った。

あのとき夢の中で青年に、「長いこと待たせたね」と言われてしたことのお触りだけでもと、手を繋いで、シミュレーションしたのであった。

駅まで送る際に、この結果が兆候として出るはずだから、目的とする人はあなただったかどうかかわかるとの話であった。

ところが、これが兆候なのだろうというようなことが起きた。

移情閣で手を繋いでからちょうどまる九日たって、M7.4の鳥取西部地震が起きたのである。

発生時刻は、2000.10.6 13:30だった。調べてみれば、シミュレート時刻からちょうど九日目、216時間後であった。しかも地震発生日は旧暦の九月九日ひのととりの日で、震源地も日野・鳥取(鳥取県日野町)というわけであった。

九の数はウシトラノコンシンを奉斎した九鬼氏にちなむため、彼女の宗教観からすれば妥当な現れ方。それが旧暦の重陽の節句という重なり方をした上、火の鳥が二重に掛けて示されていた。

これは、兆候として驚異的な出来事なのはむろんのことだった。

意趣を悟り、そのとき歌った短歌。

時悟り 蓬萊出でて 鶴亀は 此地にすべりて 瑞い世開く
道別きて 集いすべりし 鶴亀に 舞子が浜を 火の鳥が発つ

その夢の中で、青年の名前は「キンイロタイシ」と言ったようだったとの彼女の言。そこからだ。この名を手懸りにネットで調べれば、ようやくひとつ、慶應義塾大学の奈良絵本のページから、御伽草子の「毘沙門の本地」に、毘沙門天となった人物の名がそうであることが分かった。毘沙門さんは[我が母に縁ある神様](#)でもあるから、おのずと興奮が沸き起こった。

さて、それからの展開はめまぐるしかった。彼女はDVと浪費癖の夫とその月のうちに離婚し、三人の子供をみな引き取ることになったものの、束縛生活から脱していくことになった。我々は逢瀬を楽しむようになった。

しかし、やろうとしていることが大望のため、邪神の妨害するところとなり、彼女はその方面からの干渉に耐えられず、我々の関係は2002年11月に破綻した。

私は同時並行的に、UFO関係仲間の催しに参加していた。当時、武良信行氏(キタロウ)と私と二人で運営していたUFOビデオ撮影友の会に、2003年になって参加してこられた密教に精通した坂本廣志氏(ヒラサカ)にこの話をしたとたん、芋づる式に答えが出てくるわ出てくるわ。

「(移情閣の三階にいた)その青年は、毘沙門天や、サナートクマラや、大魔王や、金星王や、ルシファーや、鞍馬天狗や、大天狗様や(神名の順序は定かに覚えていない)・・・神々さえも恐れおののくほどの恐ろしい存在やで」と、彼は興奮した口調でまくしたてた。

それと同時に、彼は霊視能力を駆使して、「この女の人は、鬼のところから何かを盗んで来とるはずやで」と言うのである。まさに彼女は移情閣までの夢の道行で、鬼に追われていたのである。いったい何を盗んできたというのだろう。私は新神話で、それまでこの女性に、白蛇伝の白蛇の精を設定していた。これなら、西王母の蟠桃苑の桃を盗んだという話になるのだが。

あらためてその青年はウシトラノコンシンでもあるのか、と坂本氏に問うと、「それも同じやがな」と興奮して話してくれたのであった。それは彼女の属するMOAの宗教観からすると、最も大事な神であった。

そのとき初めて、毘沙門天がクマラ大天狗やルシファー、さらにはウシトラノコンシンへと繋がったのだった。

(残念ながら、この女性とは2002年11月に別れて交際不能となったため、坂本氏の話伝えることができていない)

そしてこの女性の青年と出会った二階とは、生命の木で言えば神と人の出会う場、神人共存のティファレトとして、まさにふさわしい設定であった。そして今なお暗がり(非公開拝観禁止)に置か

れている三階は、ダクトであり、鞍馬(暗間)であるところの鞍馬山に対応しているのである。

新神話超常体験のうちカナメになる二つのこと

<http://p.booklog.jp/book/97537>

著者 : yae-mon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yae-mon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97537>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97537>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ